

受講番号 18002 学校名 室戸高等学校 氏名 中澤 元

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 12 名
科目名 Reading 単位数(授業時数) 4 時間 使用教科書名 Planet Blue Reading Navigator

クラスの様子・特徴

3年次でReadingを選択する生徒は、ある一定の習熟度の生徒に限るとしているにも関わらず、やはり学力に開きがある。12名という人数は、各自の能力や学習意欲を把握しやすいのではないと思う。

問題の確定

英語が好きな生徒は今よりも圧倒的な速度と理解力が身につくように、苦手な生徒は少しでも向上していけるように指導する。

予備調査

A 授業の観察

総勢12名という多すぎることはないクラスである。学習意欲の高い生徒が多い。授業中の反応もよく、真剣に耳を傾けてくれる生徒の多いクラスである。とはいえ、苦手意識をもつ生徒の中にはいるため、配慮が必要であると思われる。

B 生徒による授業評価

「楽しい授業を望む」という声が圧倒的に多い。「読解力をつけたい」という生徒も何人かいる中で、やはり「話せるようになりたい」という声も聞かれる。

C 学力データ

中学までの基礎的な学習内容が定着していない生徒がいる一方で、実用英語技能検定準2級を取得している者もいる。

リサーチ・クエスチョン

英語長文読解の速度と理解力の向上を目指すにはどうしたらよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

英語の長文が読めるようになるには、まず量をこなさなければいけないのではないかと。

実践1

授業で扱った文章を、繰り返し読ませる。1回で終わらせることなく、何回も読むことで速度と理解力が増していくことを実感させる。それを喜びと感じさせ、長文に対する苦手意識を払拭させる。本文を書き写す手間を省くために、全文をタイプしたハンドアウトを作成し、配布した。同時に日本語訳も記載し、授業中の和訳にとられる時間をできるだけ少なくすむように配慮した。

検証1

ハンドアウトの評判はよかった。ただ、単語を覚えるのが苦手な生徒ほど英語を書くのを面倒くさく思う傾向がある。そのような生徒の英語のスペルに対する苦手意識を克服させるためには、英語を書き写すことも必要であるのかもしれない。その手間を省いたのは、生徒に楽をさせるだけで、逆効果になってしまった可能性がある。

仮説2

英語の長文が読めるようになるには、授業中に読む時間と量だけでは足りないのではないかと。

実践2

自宅での学習を積極的に促す。授業の最初に各自の成果をチェックし、速度や理解度が上がっているれば褒め、なかなか成果が現れない場合は励まし、家庭学習が定着するよう図る。ハンドアウトに、宿題をやった記録を残す欄を設けた。本文を読んだ所要時間と理解度を記入し、予習と復習を兼ねて毎回やってこさせた。

検証2

宿題が定着した生徒は僅かであった。宿題を授業の評価に加えるとはっきりと伝えても、毎回してくる生徒は2～3名であった。事後に行ったアンケートでは、宿題をほぼ毎回こなした生徒たちは読解力が少なからず以前より上がったと実感していた。一方で全くやってこなかった生徒の中には、やっていれば少しは力がついたかもしれないと後悔している者もいた。

仮説3

黙読だけでなく音読をさせることで、スピーキング能力の向上にもつながるのではないかと。

実践3

授業で解説した本文を、黙読させるだけでなく、音読もさせるように指導する。一人でも十分読めるよう、授業中の発音指導などを徹底させていく。レッスンが終わるごとに、最初から最後まで本文を通して読む時間を設けた。何も書いていない状態の教科書を使用し、行間に書いている意味や読みを頼りにすることなく、英文を英文として読むことで力をつけさせるようにした。

検証3

英文を読むのが苦手な生徒はやはり絶対的な練習量が不足していると思われる。声はたいへん元気であるが、読み方はでたらめな生徒があり、彼らの指導を毎回徹底するのがたいへん難しかった。それに時間をかけると思うように他の指導ができなくなるため、バランスをとることが必要となった。

研究の成果

宿題をしっかりとこなした生徒が「読解力が向上した」という実感を持っているというのは、期待通りの成果であり、うれしい結果であった。ただ今回の研究では、アンケートによる調査で自分の実感としてデータを取っただけであり、具体的にどれだけ伸びたか、という数値的なデータをとることができなかった。そのため、今後同じ取り組みをしていく中で、生徒へ確実にフィードバックができるような、より明確な形で調査方法を研究していかなければならない。

今後の授業改善の課題

宿題を全員に徹底させることができなかったのが大変悔やまれる。やはり、早い時期からこういった取り組みをすることが、自学自習の定着を図るためには必要ではないだろうか。宿題に手をつけなかった生徒も「やっていれば少しは身になったかもしれない」と考えていることがわかったのも、ある意味成果として次につなげていかなければならない課題である。